

1 特集

保護者の成長を促す園の支援とは

1 インタビュー

今求められている保護者支援のあり方

京都大学大学院教育学研究科教授 **子安増生**



4 事例紹介1

子どもと保護者と保育者が共に育つ「保護者サポートシステム」を構築
山口大学教育学部附属幼稚園

10 事例紹介2

子育て講座を受講した母親が「お母さん保育士」として活躍
スカイハイツ幼稚園

14 事例紹介3

自由参加型のサークルで保護者同士のつながりを再生
津田このみ保育園

16 事例紹介4

子どもの様子の伝え方を工夫して、保護者と保育者が思いを共有
板橋区立大谷口保育園

20 調査データ

データから見る 幼児教育

父親の子どもとのかかわりと子育て観

家事や育児に今以上にかかわりたいか	20	子どもをどこまで進学させたいか	23
もっとかかわりたいと思っている家事や育児	20	子どもの将来像	23
父親が家事・育児をする頻度	21	父親として不安なこと	24
子育てで力を入れたいこと	22		

ベネッセ 次世代育成研究所 とは

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの育成環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

特集

保護者の成長を促す 園の支援とは

インタビュー

今求められている保護者支援のあり方

地域や家庭における人間関係のつながりが弱くなり、子育てに悩む保護者が増える傾向にあります。

それと同時に、園に対する保護者の期待も高くなっているようです。

子どもとともに保護者自身も「保護者として」成長していくために、園ではどのような支援ができるのでしょうか。

発達心理学を専門とする子安増生先生にお話をうかがいました。



京都大学大学院教育学研究科教授

子安 増生

こやす・ますお

京都大学大学院教育学研究科教授。専門は発達心理学。2008年より日本発達心理学会理事長を務める。著書に、「幼児期の他者理解の発達」(京都大学学術出版会)、「心の理論」(岩波書店)、共著に「幼児が「心」に出会うとき-発達心理学から見た縦割り保育」(有斐閣)など。

自分の子ども時代を振り返り 子育てに客観性を 保つことが大切

もしかすると、現代は子育てが難しい時代かもしれない——私はそう考えることがあります。核家族化が進んで体験にもとづいた子育ての知識や経験が受け継ぎにくくなって

いる一方、テレビやインターネットにはさまざまな情報があふれている。保護者が子育てに迷いをもつのは当然と言えるかもしれません。その結果、幼稚園や保育所に多種多様なテーマについてアドバイスを求めるだけでなく、保育者に過剰な期待や要求を寄せるようになる保護者が増えているのだと考えられます。

保護者の抱く不安や心配を取り除くには、まず、子どもの発達についての確に理解してもらうことが大切です。そこで発達心理学の見地から、保護者に対してどのようなサポートや助言ができるかをお話ししましょう。

私が保護者に対して強調して伝えるのが、常に客観的な視点をもって



み出した概念で、親子の情緒的・心理的なつながりを指します。ボウルビィは第二次世界大戦で孤児になった子どもの心身の発達が遅れた要因は、医学的なケアよりも、ヒューマンケアにあると指摘して、愛着関係の大切さを訴えました。

愛着と子どもの発達の間を、このようなテストがあります。母親と子ども、そして見ず知らずの他人の3人がしばらく同じ部屋で過ごした後、母親だけ、または母親と他人と一緒に室外に出ます。すると、どちらの場合も、愛着関係が十分な親子の場合、子どもはあまり動揺しませんが、不十分な場合は母親から離れると、心理的に非常に不安定になります。この結果は、しっかりとされた親子関係があれば、子どもの自立がスムーズになることを示唆しています。

乳児期は親子がずっと一緒に過ごすのも良いのですが、やがて発達に伴って離れる場面が生じてきます。タイミングとしては、幼稚園や保育所に入る、子ども部屋をつくる、あるいは小学校に入学するときなどが考えられるでしょう。

こうした節目では、心理的な愛着を保ちながらも、かたちの上では明確に接し方を変えなくてはなりません。それが「ぴったりくっつく」ことです。そのような体験の積み重ねにより、子どもの自立心が育っていくのです。

これは、親にとっては「子離れ」のきっかけとなるでしょう。いつま

でも親が子どもの身のまわりの世話をしていたら、子どもが何でもできるようにならないのは当然です。にもかかわらず、「うちの子は何もできない」と嘆く親をよく見かけます。こうした悪循環に陥らないためには、保護者が子どもの力のある程度信じ、子どもに任せる範囲を徐々に増やしていく必要があるでしょう。

繰り返しになりますが、子どもと「離れる」ときでも、常に心理的なつながりは実感させることが重要です。手のひらを返すように冷たい態度を取れば、愛着関係が崩れてしまいかねません。つまり、「ぴったりくっつく」と「ぴったり離れる」はセットになっているのです。

発達に応じて使い分けたい「号令・命令・訓令」

子どもの発達に伴い、語りかけ方も変えてください。その際、「号令・命令・訓令」の3つの考え方を意識すると、発達段階に応じた伝え方ができるでしょう。これは保護者だけでなく、保育者にもぜひ知っていただきたいことです。

号令は「○○をしなさい」と行動だけを伝え、命令は「○○だから、○○をしなさい」と理由も示します。一方、訓令は「○○をしなさい。方法は任せる」と、自由度をもたせた言い方です。

乳児に対して命令をしても理解してもらえませんが、号令のほうが

適切です。逆に5歳児に号令ばかりをしていたら、自分で考えて行動する力が育ちませんので、理由を伝える必要があるでしょう。また訓令はかなり高度ですので、一般的には小学生になってからと考えてよいでしょう。

もうひとつ、語りかけ方についてお話ししましょう。生活や保育の中で「駆け・引き」の言葉を意識することの大切さです。

「駆け」は、「もっとがんばって」「もう終わっちゃうの?」「まだできるでしょう」などと、子どもを励まして奮立たせる言葉。一方、「引き」は、「よくがんばったね」「今日はこれくらいにしよう」「また明日やろうか」など、子どもを認めて活動を終わらせる言葉です。明らかに疲れている子どもに対して、駆けの言葉をかけるのは酷なだけでなく、信頼関係を損ないかねません。きちんと引きの言葉をかければ、子どもは「自分を受け入れてくれた」と満足し、次もがんばろうという気持ちになるでしょう。場面に応じて、どちらが適切かを判断してください。

信頼関係を構築するカギは保護者との約束を守ること

最後に、保護者との関係づくりについて考えてみましょう。保護者の中には、幼稚園や保育所に頼りすぎて、「どんなことでも対応してくれるはず」と考えるかたもいるかもしれませんが、現実には保育者

のできることに限りがありますから、ときには断然なくてはならないこともあるでしょう。そのようなときに、保護者との関係をギクシャクさせないためには、日ごろの信頼関係が前提となります。

すべての人間関係の基本ですが、保護者から信頼されるには約束を守らなければなりません。保護者との約束とは、個々に口頭で交わしたものでだけでなく、教育方針など園全体として打ち出しているものも含まれます。

約束を守るには、「守れない約束はしない」ことも大事です。安請け合いをしたり、全てを園が背負い込もうとしたりせず、ふだんから自分たちのできることに自覚的になっていくとよいでしょう。信頼関係さえできれば、例えば、子どもの体調に関する質問に対し、「それは園ではなく、病院で聞いてください」と返答しても、おそらく冷たくあしらわれたという悪い感情は抱かれなくていいでしょう。保護者が保育者に信頼を寄せていることは、子どもにも必ず伝わり、子どもと保育者の関係にも良い影響を与えるはずですよ。

子育てには悩みが付きものですが、もちろんプラス面も多く、特に子どもを通して人生を生き直すことができるのが最大の喜びだと、私は考えています。そのような子育てのプラス面を伝えることも、保護者の不安や心配を減らすとともに、信頼関係や協力関係を築いていくためのカギとなるのではないのでしょうか。

子育てをしてほしいということですが、例え話ですが、おそろくちょうちょうは青虫を見て、かつての自分の姿とは思わないでしょう。同様に大人はかつて自分が子どもだったことを忘れがちです。子どもには子どもなりの苦しさや悲しさ、また楽しさや喜びがあり、それらに共感できないと親子の気持ちにギャップが生じます。保護者は「自分は親から何を言われてつらかったか、うれしかったか」などと、常に自身を振り返る必要があるでしょう。

客観的な視点をもてないと、保護者は子どもの成長を長い時間の中でとらえられず、ちょっとしたことに不安を抱くようになります。例えば、オムツ外れが多少遅くなくても大問題ではないことは、客観的に考えれば

分かるでしょう。しかし、わが子となると、そう考えられない親が少なくありません。そのような保護者には、今現在の出来事だけに集中せず、長い時間の中で子どもを見守ることの大切さを伝えるとよいでしょう。

愛着関係を保ちながら親子が離れていく体験が重要

次に、子どもの発達に応じて接し方を変えることの大切さをお話ししましょう。私はこれを「ぴったりくっついて、ぴったり離れること」と言い表しています。

「くっつく」は、「愛着」と言い換えられます。愛着とはイギリスの児童精神科医ジョン・ボウルビィが生